

# 形容詞の連用形名詞法について

林 謙 太 郎

## 一

形容詞の連用形が名詞のようなふるまいをする場合があることは、夙に知られている事実である。たとえば、金澤（一九〇三、p 一三〇）では、文語の例ではあるが、

くの名詞法戀しくの多かる我」の類 とある。一方、三矢（一九〇八―一九二七、p 一三六―七）は形容詞が「名詞になること」の項で、同じ連用形名詞にも実は違いのあることを指摘している。一つは、

近く	ヲ望ム
遠く	ガ、
多く	ニ、

の如し。此の例は少し。

と述べ、これらの語は素直に名詞と認めるが、今一つのグループ、「時じくのかぐのこのみ」「早くの事」「戀しくの多かる我」「古くより」などは、体言ではあるが、真の名詞ではないとする。これは名詞化の度合にも差があることを述べたもので注意されてよい。

また、三矢と同年に刊行された山田（一九〇八 p 二四六）では、「とほくの國の人、多くの軍勢、時じくのかぐのこのみ、

遠く<sup>マヤ</sup>の親類、近く<sup>マヤ</sup>の他人」を挙げている。さらに山田（一九一四―一九五四、P三七七）は、「名詞の如くに使用せるものあり」として、

此左衛門佐ト申女房ハ若クヨリ法皇ノ御母儀待賢門院ニ候ワレケルカ：

彼貞能ハ少クヨリ我ニ志深テ不便ニ存候

の二例を指摘した。

国語調査委員会の『口語法』（一九一六、P四三）では、「名詞のように用いること」の項で、

遠く<sup>マヤ</sup>をながめる。 近く<sup>マヤ</sup>え移る。

多くの寶、 おそく<sup>マヤ</sup>まではたらく。

の例を掲げ、その『同別記』（一九一七、P一七六）では、次のように解説されている。

「遠く<sup>マヤ</sup>をながめる」わ、「遠くある所を」、「近く<sup>マヤ</sup>え移る」わ、「近くある所え」、「多くの寶」わ、「多くある所

の、」「おそく<sup>マヤ</sup>まで、はたらく」わ、「遅くある時」を略したのであらう、「遠く<sup>マヤ</sup>の親類、近く<sup>マヤ</sup>の他人、」「疾く<sup>マヤ</sup>の

昔」、「全く<sup>マヤ</sup>の誤」など、も云う。

この解説からは、「所」「量」「時」を示す形容詞に見られることが知れる。

次に、比較的近年に出版された文法書を見てみよう。湯澤（一九五九、P二〇）は、「品詞の転成と語の構成」という章のなかで、形容詞の連用形から名詞になったものとして、「多くの<sup>マヤ</sup>人」「近く<sup>マヤ</sup>より遠く<sup>マヤ</sup>まで尋ね求め」「若く<sup>マヤ</sup>より仏道を心にかけ」「早く<sup>マヤ</sup>の守<sup>かみ</sup>」「国司<sup>かみ</sup>」「永く<sup>マヤ</sup>の名」「永久ノ汚名<sup>マヤ</sup>」「幼く<sup>マヤ</sup>より……」さらに、「僧都の<sup>をいふ</sup>少うより不便にして召仕はれける童なり。（平家、三、有王）」のような音便形のものまで含めて例に挙げている。

飯豊（一九七三）は、この種の語を形容詞連用形が「名詞と同じように用いられる」という項目でとりあげ、用例としては、「朝早く<sup>マヤ</sup>より夜遅く<sup>マヤ</sup>まで働く。」「幼く<sup>マヤ</sup>より学に志す。」「近く<sup>マヤ</sup>に住む多くの人を招きたり。」（以上、P一七五）を挙げて

いる。さらに飯豊は、単に用例を挙げるにとどまらず、これらの用法を持つ語に対して、幾つかの考察も加えている。それらを簡条書きにしてまとめてみると以下のようになる。

①このような用法を持つ語は限られている。

②「ク活用」に多い。

③時間「早し・遅し・古し（新し）」

方向「遠し・近し」

数「多し（少なし）」

などに限られる。

④名詞としての機能が十分でないものもある。（「遠く・近く・多く」などに対して、「早く・遅く・古く・幼く」などは、格助詞や連体修飾語をとることがきわめて限定される）

⑤用言としての性格を失っていないから、上に副詞的修飾語をとることもできる。（きわめて遠くに住む）

ここに至って、連用形名詞法の輪郭がかなり明らかになってきたと思われる。小論では以上の研究成果を踏まえつつ、今一度原点に立ち返り、以下の問題に的を絞って考察を加えてみたいと思う。

①どのような語がなりうるか、そしてその理由は？

②どのような語がなりえないか、そしてその理由は？

③この種の語が表現する意味特性は何か？

そして、これらを考えるにあたっては、われわれの語感が容易に働くところの現代語をその対象とすることを予めお断わりしておきたい。

## 二

まず、①どのような語がなりうるか、そしてその理由は？

前章で先学が共通して触れていたように、この種の語は、多くの形容詞のなかにあって極めて限られた語にしか発生しない。この点が動詞の連用形名詞法と大きく異なる点である。しかも名詞化の「強度」も語によって違うという複雑さも指摘されていた。

そこで小論では、名詞化度合を知るために、助詞の承接状況を物差しにして見ていきたいと思う。とりあげる助詞は、格助詞と副助詞である。

## (1) 名詞化強度上位グループ

近く・遠く・(深く)・多く

以下に、助詞の具体的な語との承接状況を見てみようと思うが、その分析は筆者の判断による。承接する場合は○、しない場合は×で示す。なお、「深く」は、単独の場合ではなく、「海底深く」、「海の深く」、「森の深く」のような連語の成分として使われた場合を想定しているため、括弧付きで示した。(次頁の表、参照)

既に先学の指摘のある「近く・遠く・多く」に「(深く)」を加えて考えてみたわけであるが、表からもわかるように、「近く・遠く・(深く)」グループと「多く」とは、副助詞との承接で違いが認められる。これは、先に国語調査委員会(一九二七、P一七六)が前者を「よくある所」、後者を「多くある所の」と言い替えたことと関係がある。すなわち、前者はある一つの具体事物を指向するのに対し、後者の「多く」は、具体事物は指向するのだが、その数は複雑で限定的でない。それが、副助詞の限定性と齟齬をきたすのであろう。

次に、この四語の名詞用法の存在理由を考えると、まず想起されるのが仁田(一九八〇)の考察である。(ただし、

格 助 詞										
や	で	より	から	と	へ	に	を	の	が	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	近く
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	遠く
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(深く)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	多く

副 助 詞														は
か	やら	なり	など	くらい	ほど	だけ	ばかり	まで	しか	でも	さえ	こそ	も	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○

仁田はこれら四語のうちでは、「深い」はとりあげていない）仁田は、まず形容詞の連体修飾用法には二つの場合があることを指摘する。一つは、「\*多イ女ノ人が歩イテキタ」のような「規定語が形容詞」の場合。今一つは、「シラガノ多イ女ノ人が歩イテ来タ」のような規定語が「形容詞を Predicate とする句」（以上、P二四三）の場合である。初めの文は非文法的な文である。「多クノ女ノ人が……」にすれば自然な文になる。それは、「女ノ人」という語が、それ自身に本来的に「数」という属性を有していないために、「多い」の装定を許さないのだ。「数」は被修飾名詞（『女ノ人』にとっ

ては「外在的（外延的）」なものなのだから——と仁田は主張するのである。これを承けて筆者なりに議論を進めてゆくと、「外在的（外延的）」に帯びるあり方で限定する」（P一六四）「多クノ女ノ人」のような場合、「外在的（外延的）」とは文字通り、被修飾名詞の外に独立して存在するものを意味するから、それが「多く」という名詞の存在を要求したのではないかと考えられるのである。

ところで、森田（一九七七、P一二七）が指摘した、被修飾名詞が「とき、ばあい、うち、ほう、こと、の、はず」などの形式名詞である場合は「多いときには……」「多いほうがいい」のように「多い」の装定を許すということは、これらは共通して文脈からの依存を前提としているからであろう。文脈からの依存は、言い替えば、「形容詞を Predicate とする句」の Subject を明示しない場合ということになるのか。

話は前後するが、仁田は「近い」「遠い」にも同様な分析を加え、これらは「物理的距離」（P二六四）という量的側面を持つという点で、「多い」との共通性を指摘する。

## （2）名詞化強度中位グループ

早く・遅く・古く・若く

これらは、格助詞では「に」「から」、副助詞では「は」「まで」が承接すると思われる。「朝早くから夜遅くまで」が可能なら、「夜遅くから始めて、朝早くまでかかった」も可能であろう。また「古くから」「若くから」はよく言われるが、「五十年も（古くまで・若くまで）さかのぼって考えれば……」という言い方もできと思う。

これら四語の名詞用法を許しているのは、これらが共通して「時点」を示すことができるからである。たとえば、同じ「はやく・おそく」でも、速度を示す「速く・遅く」だったら、名詞用法を持てない。「動き」をイメージさせてしまい、名詞の持つ固定性を示し得ないからである。ともあれ、これら四語の示す「時点」は、上位グループの示す、謂わば「空間」に比べれば、実体としては弱いので当然、名詞化強度は弱くなる。

### (3) 名詞化強度下位グループ

新しく・詳しく・正しく・疾う(疾く)・全く

このうち、「新しく・詳しく・正しく」には副助詞の「は」が承接する。「疾う(疾く)・全く」は、「疾う(疾く)」に終わっています。「疾う(疾く)」の昔「全くの幸運」などのように使われ、辞書などでは、副詞に分類されていたりして、元来は形容詞だったことを意識せずに使っているようである。

これらの名詞用法を許している理由を考えるに、「新しく」は、「古くは『侍り』を使い、新しくは『候ふ』を使う」のように使われ、一応「時点」を示しているが、「古く」に比べて少々曖昧なところが、名詞化強度を弱くしている原因であろうか。「詳しく」は、「詳しいことは・詳しい内容は」、「正しくは」は「正しいものは・正しい内容は」のように言い替えられ、事柄全体を曖昧に指している点が下位に甘んじている理由であろう。

一方、「疾う(疾く)・全く」は、話し手の事態へのとらえ方の表現を示すことから、固定性を持った概念からかけ離れてゆき、謂わば名詞と副詞の中間的存在になっている。

## 三

それでは、次の問題点、②どのような語がなりえないか、そしてその理由は？

について考えてみたいと思う。

まず、前章で挙げた語に直接関連したものでは、「多く・(深く)」の反対語である「少なく・浅く」が挙げられよう。これらには名詞用法がない。さすれば、飯豊(一九七三)で挙げられていた「(少なし)」はどう考えたらよいのか。用例がなく、おまけに括弧付きではあるが不審である。「少なく」に名詞用法がないのは、「少し」がその意味を担っているからではないかと思う。

少シノ時。衆人教ノ如（クシテ）「而」請（フ）。（築島一九六七、P三二七）

上達部おほくはまかで給ひて、すこしぞとまり給へる。（『紫式部日記』寛弘六年九月十一日、岩波大系本、P五〇三）

「浅く」の場合はどうか。「浅く」は「深く」に比べて固定的なイメージが稀薄なためか、あるいは「浅瀬」という語がその意味を担っているからか。

あまの河あさせしら浪たどりつゝ、わたりはてねばあけぞしにける（『紀友則』『古今集』、秋上・一七七）

次は、もう少し広く見ていこう。形容詞というものを客観的な性質・状態を示す、いわゆる属性形容詞と主観的な感情・感覚を示す、いわゆる感情形容詞とに二分して考えてみたとき、連用形名詞法を持たないのは後者である。それは、感情・感覚というものは文字通り心の中の問題で、形として取り出せるものではないからである。

それでは属性形容詞はどうか。これとてごく限られたものにしか存在しないことは、前章でさんざん見てきた通りである。繰り返しになるが、「量」「距離」「時点」を示す形容詞には存在した。ここで素朴な疑問をいなく。「量的側面」を持つ「属性形容詞」は外にもたくさんあるではないか。たとえば、

高イ——低イ      長イ——短イ

厚イ——薄イ      太イ——細イ

広イ——狭イ      大キイ——小サイ

などは、なにゆえ連用形名詞法を持たないのか。その違いを知る物差しの一つは、接尾辞「サ」を付けたときの意味である。連用形名詞法を持つ語は、「近サ・遠サ・多サ・早サ・遅サ・古サ・若サ・新しサ・詳しサ」のように、みな程度の甚だしいことを意味している。（但し、「深サ」は例外）。それに対して連用形名詞法を持たない語は、「高サ・長サ・厚サ・太サ・広サ・大キサ」のように、単に程度を示しているだけである。言い替えば、それだけ卓立性がないことになり、固定的イメージとはかけ離れ、単独では名詞の機能を持たないことにつながるのであらうか。



#### 四

それでは、最後の問題点に移ろう。

③この種の語が表現する意味特性は何か？

これを考えやすくするために、もう一度今まで取り上げてきたものを列挙してみよう。

近く・遠く・(深く)・多く

早く・遅く・古く・若く

新しく・詳しく・正しく・疾う(疾つく)・全く

これらに共通していることは、まず数値を云々する必要のない時の表現であるということである。「近く・遠く」といっても何キロメートルの距離があるかは問題にしない。同様に、「多くの国々」といっても実際の数は重要でない。「早く・遅く」も実際の日時は取り立てて知らせる必要のない時に使う表現ということである。他の語の場合も同様に考えられるであろう。

次に位相の面から考えてみると、これらは多く改まった言い方になる。改まっていない普通の言い方と対比させて見よう。

近くは——近い所では・最近のことでは

遠くは——遠い所では・かなり昔のことでは

多く(が・は……)——大部分(が・は……)

多くの——たくさんの・大部分の

早く(から・に)——随分前(から・に)

早くは——早いときには

古く(から・に・は)——昔(から・に・は)

若く(から・に)——若いとき(から・に)

若くは——若いときには

新しくは——比較的新しいときには

詳しくは——詳しいことは

正しくは——正しいものは

全くの——ほんと本当に・全く

## 五

最後に、用例を列挙して小稿を閉じたいと思う。なお、用例はできるだけ初出例になるべく努力したが、甚だ心許無い。用例文の漢字の字体は現行字体に改めた。

〈アタラシク「新」〉

①(林注「汲みに行かめど道の知らなく」を指して)こは古言にて、新しくはムの第四変化にナリを添へて其の確逆前提法を用うるなり。(三矢一九〇八「一九二七」P二五〇)(該当語の傍線は筆者。以下同じ)

〈オソク「遅」〉

①「大分遅くまで起きていたんですか」

(夏目漱石『三四郎』(文例番号・一四二一、『用語』四卷)

この例を含め、近代作家の作品については、教育社の『用語索引』を参照した。以後これらの出典箇所表示は、(文一四

二『用語』一)のよう示すことにする。

へオホク「多」

①是の初の仏身は衆生の意多クの種類有ルに随フが故に、種種の相を現(し)たまふ。

(西大寺本『金光明最勝王經』卷二)(春日一九四二「一九八五」P二五)

②「多<sup>おほ</sup>くの人の身をいたづらになして……」

(『竹取物語』)(岩波大系本、P五三、以下、「大系本」と略記する)

③五の甚深の中には多クは唯(し)慧が性と真如(とを)モテ體と為<sup>なす</sup>。

(石山寺藏『法華經玄贊』卷三)(中田一九五四「一九七九」P一五八)

④「おほくは、殿<sup>どの</sup>の御催<sup>もよほ</sup>しにてなん、まうできつる。……」

(『蜻蛉日記』)(大系本、P二二七)

⑤「姫」是をとりもちて、要<sup>えう</sup>じ給フべき所所に持ていき、おほくになシて、衣布<sup>きぬぬの</sup>など買<sup>か</sup>ヒて、その設<sup>まうけ</sup>す。

(『宇津保物語』「俊蔭」)(大系本一、P七二)

⑥「あれ御覧<sup>らん</sup>候へ。池殿<sup>いけどの</sup>の御とゞまり候に、おほうの侍共<sup>さぶらひども</sup>のつきまいらせて罷<sup>まかり</sup>とゞまるが奇怪<sup>きつぐわい</sup>におぼえ候。……」

(『平家物語』卷七)(大系本下、P一〇九)

⑦三千代は例によつて多<sup>おほ</sup>くを語る事を好まなかつた。

(漱石『それから』)(文四二八六『用語』五)

⑧然<sup>しか</sup>し過去の数々の事を考えると、多<sup>おほ</sup>くが結局一人角力<sup>ずもう</sup>になる所を想<sup>おも</sup>うと、……

(志賀直哉『暗夜行路』)(文九〇〇六『用語』五)

へクハシク「詳」

①「くはしくは、法師の心に、え悟り侍らず。……」

〔源氏物語〕「薄雲」一（大系本二、P二二三）

②「よべは事成りにき。笑はず成（り）にしかば、嬉しくなん。委しくは対面に。……」

〔落窪物語〕卷二（大系本、P二二三）

へコヒシク「恋」へ

①初雪は千重に降りしけ恋しくの（故悲之久能）多かるわれは見つつ偲はむ（『万葉集』四四七五）

へタダシク「正」へ

①毛越寺は正しくは毛越寺なるべしと案内の人の言ふにうなづく

（岡野一九六四、P九二）

へチカク「近」へ

①「……おそろしき物におもひはてにためれば、ちかくはえおもはず」などぞある。

〔蜻蛉日記〕（大系本、P二三〇）

②蘆原の田鶴の数とも見ぬ物を雲井ちかくもこゑのするかな

〔宇津保〕「田鶴の群鳥」一（大系本二、P二三〇）

③右近がいはん事、さすがに、いとほしければ、ちかくも、えさぶらひ寄らず。

〔源氏〕「夕顔」一（大系本二、P二四五）

④「……さらば、時ぐは近くをと聞えたり。」

〔宇津保〕「国譲」中一（大系本三、P一六四）

⑤「……遠近ニ白檀・紫檀ヲ求テ、……」

〔今昔物語集〕卷十二（大系本三、P一六八）

⑥ 遠<sup>チカク</sup> 近<sup>ナニヨキタリ</sup>ノ道俗・男女来集テ、……

〔今昔〕卷十七（大系本三、P五三五）

⑦ 今ハ昔、世ニ白井ノ君ト云フ僧有<sup>アリ</sup>。此ノ近<sup>ク</sup>失<sup>ウセ</sup>ニシ。

〔今昔〕卷二十七（大系本四、P五一五）

⑧ 離<sup>レテ</sup>出<sup>イデ</sup>ニケルカ」近<sup>トリ</sup>クヨ遠<sup>デ</sup>キマ尋<sup>ネサセ</sup>……

〔今昔〕卷二十七（大系本四、P五一四）

⑨ 白河院<sup>ひと</sup>一つ御腹<sup>はら</sup>の御いもうとは、仁和寺<sup>にわじ</sup>の一品の宮とて、近<sup>ちか</sup>くまでをはしましき。

〔今鏡〕「ふぢなみの下」」（榊原他編一九八四、P二七四）

⑩ 其火けして、近<sup>ちか</sup>くへと、仰<sup>おほせ</sup>られける、

（井原西鶴『好色一代男』（文例番号・①六七、『総索引』一卷）

この例を含め、西鶴と近松門左衛門の作品については、教育社の『近代文学総索引』を参照した。以後これらの出典箇所表示は、（文①六七『総索引』一）のように示す。

⑪ 「まあ、どうやらこうやら柳橋の芸者というもの丈<sup>だけ</sup>は、近<sup>ちか</sup>くで拝見が出来そつだ。」

（森鷗外『青年』（文二五九九『用語』二）

⑫ Mが暮れ近<sup>ちか</sup>くから隣村に住むようになってからは我孫子<sup>あびこ</sup>も賑<sup>にぎ</sup>やかになった。

（志賀直哉『和解』（文二二三九『用語』二）

へチヒサク「小」

① 「……ちヒさくより、頭中将のためにといたはり生<sup>おほ</sup>したる物を」

〔「宇津保」―「初秋」〕（大系本二、P二五二）

②猶この殿は小<sup>ちひさ</sup>うよりいみじう風重<sup>おも</sup>くおはしますとて、……

〔「榮花物語」卷十二〕（大系本上、P三六八）

へトキシク「時」

①登岐土玖能迦玖能木実<sup>ときじくのかくのこのみ</sup>を求めしめたまひき。

〔「古事記」中卷〕（大系本、P二〇三）

へトク「疾」

①義朝<sup>よしものたまひ</sup>宣けるは、「信頼<sup>のぶより</sup>はとくに<sup>〔疾〕</sup>おちぬれば、遙<sup>はるか</sup>にのびたるらん。……」

〔「平治物語」中卷〕（大系本、P二四二）

②昨日ユキツクト云ハ、我力志ハ、昨日ユキツクヲ云、一步ヲ発スルコソ、今日ナレ、心ハトクヨリ往也。

〔「莊子抄」卷五48ウ〕（大塚一九八一、第七卷、P六九六）

③……これに疾<sup>と</sup>くから住<sup>す</sup>ませ給ふ御女房衆も究<sup>〔ねうばうしう〕</sup>てこれには劣<sup>おと</sup>りたり、……

〔御伽草子「鉢かつき」〕（大系本、P七一）

④とふにいふて下んせばうらむまい物かんにんしてくださんせ、

〔近松門左衛門「丹波与作待夜のこむろぶし」〕（文五七六『総索引』二）

⑤おりやとふからしつてゐる、

〔同右〕（文六七五『総索引』二）

⑥とつくより聞付無念共口おし共心一つにたへかねしが、

〔近松「夕霧阿波鳴渡」〕（文六五二『総索引』三）

⑦とつくにきやつめが請出すを私におさへられ、

(近松『心中天の網島』(文六〇四『総索引』五))

⑧……火はとくの昔に消えて居る。

(漱石『吾輩は猫である』(文二一〇一七『用語』十二))

⑨彼は例刻の五時が疾うの昔しに過ぎたのに、……

(漱石『彼岸過迄』(文一五一〇『用語』七))

⑩……疾の昔にそう取計っているかも知れない。

(同右)(文四八七『用語』七)

へトホク「遠」

①無相の思惟と解脱と三昧とを遠くより修行する故に、是の地清浄にして、障礙有(る)こと無し。

(西大寺本『金光明最勝王經』卷四)(春日一九四二「一九八五」P六六)

②使ざねとある人なれば、とをくも宿さず。

(『伊勢物語』六十九段)(大系本、P一五〇。)

③や、とほくよりおりて、ついひざまづきたり。

(『蜻蛉日記』)(大系本、P一六七)

④笛は横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やうやう近うなりゆくもをかし。

(『枕草子』二二八段)(大系本、P二五〇)

⑤不信ノ蘇規、破鏡与妻遠行ケル語

(『今昔』卷十)(大系本二、P三〇三)

⑥「……『然<sup>レバ</sup>近<sup>チカク</sup>ハ五濁<sup>ゴヂョク</sup>ニ迷<sup>マド</sup>輩<sup>トモガラ</sup>ヲ救<sup>ヲ</sup>ヒ、遠<sup>トホク</sup>ハ三途<sup>サンゾ</sup>ニ苦<sup>ニ</sup>者<sup>ヲ</sup>訪<sup>トブラ</sup>トハム』宣<sup>ノタマフ</sup>」ト見<sup>ト</sup>テ、夢覺<sup>サメヌ</sup>。

(同右、卷十七) (大系本三、P 五一七)

⑦「……ちかくより遠<sup>トホク</sup>くまで、尋<sup>たづね</sup>もとめさすれどもなければ、……

(『宇治拾遺物語』卷十ノ五) (大系本、P 二八七)

⑧遠<sup>トホク</sup>へ聞<sup>キ</sup>へテ人ヲ驚<sup>オドロ</sup>カスソ

(『論語抄』卷三28ウ) (坂詰一九八四、P 一六八)

⑨言ハチャット遠<sup>トホク</sup>カラ望<sup>ノゾミ</sup>メハ殺然<sup>トシテ</sup>黄ナルヤウナカヨク／＼コマカニ省察<sup>シヤウサツ</sup>スレハ死人ノ色ナソ

(『史記抄』卷十三41ウ) (岡見・大塚一九七一、第一卷、P 四五四)

⑩あのネ、山<sup>やま</sup>だの、海<sup>うみ</sup>だのとある所<sup>ところ</sup>の、遠<sup>とを</sup>の方<sup>ほう</sup>でお産<sup>うまれ</sup>だから、

(『浮世風呂』三編卷之上) (大系本、P 一八六)

⑪「存<sup>ぞん</sup>じません」と妻君<sup>さいくん</sup>は遠<sup>とを</sup>くで簡単<sup>かんぱん</sup>な返事<sup>へんじ</sup>をした。

(漱石『吾輩は猫である』(文一〇八四六『用語』十二)

へナガク「長」

①「……今<sup>いま</sup>、近<sup>ちか</sup>くて、人<sup>ひと</sup>の、心置<sup>こお</sup>くまじく、目安<sup>めやす</sup>き様<sup>さま</sup>にもてなして、行<sup>ゆ</sup>く末<sup>すえ</sup>ながくを」と、思<sup>おも</sup>ひのどめつゝ、過<sup>か</sup>ぐしつるを。……」

(『源氏』「蜻蛉」) (大系本五、P 三〇三)

②「……『奈良坂<sup>ナラサカ</sup>盗人<sup>トウジン</sup>戦<sup>セキ</sup>、被射<sup>イハレ</sup>』被<sup>イハレ</sup>云<sup>バ</sup>永<sup>エイ</sup>ク名也<sup>ナメ</sup>。……」

(『今昔』卷十九) (大系本四、P 二二九)

③「……やっぱり、ああ云<sup>い</sup>う事<sup>こと</sup>があると、永<sup>えい</sup>くまで後<sup>あと</sup>へ響<sup>ひび</sup>くものだからな」



(漱石『門』)(文七四五『用語』六)

へハヤク「早」

①このあひだに、はやくのかみのこ、やまぐちのちみね、さけ、よきものどももてきて、

(『土左日記』)(大系本、P三二)

②涙の川のはやくよりかくあさましきうらゆへになかる、こともたえねども……

(『蜻蛉日記』)(大系本、P一二九)

③「……行正も早くより承はりて、出立ち侍ルを、暇の侍らねばなり。必ず仕うまつらん。……」

(『宇津保』「吹上」上)(大系本一、P三二三)

④日ごろこもりたるに、昼はすこしのどやかに、はやくはありし。

(『枕草子』一二〇段)(大系本、P一七五)

⑤……ハヤウカラ知テヲソウ成ト云事ハナイソ

(『毛詩抄』卷十八12才)(岡見・大塚一九七二、第六卷、P三三六)

⑥もとは檀家の一人なりしが早くに良人を失ひて寄る辺なき身の暫時……

(樋口一葉『たけくらべ』)(文五〇六、靄岡一九九二)

へフカク「深」

①東山の奥ふかく、堀埋めて、

(西鶴『好色一代男』)(文⑧四〇八『総索引』二)

へフルク「古」

①古ルクヨリ仕マツレル……

〔三宝絵詞〕上4ウ（馬淵一九八五）

②古くは「そ」を略して、あれ無しとなわびわがせこ

（三矢一九〇八「一九二七」P二四四）

③……古くから家にあつた江戸名所図絵と……

（漱石『門』（文二八一五『用語』六）

へマツタク「全」

①「全」の事骨抜きだ、……」

（漱石『吾輩は猫である』（文四九二〇『用語』十二）

②「……全くだと思つて安心して……」

（同右）（文七七六四『用語』十二）

へワカク「若」

①五日といふ日のつとめて、鞍馬より、若くより籠れる行人の髪、ところぐしラけタるが、……

（『宇津保』―「忠こそ」―（大系本一、P一四三）

②「誠まことに守かみのむすめ」と、思おもさば、まだ若わかうなどおはすとも、しか、伝へ侍らんかし。……」

（『源氏』―「東屋」―（大系本五、P一三六）

へヲサナク「幼」

①「幼おきなくより行おこなひの道みちに心こころす、みてなん侍る。……」

（『宇津保』―「忠こそ」―（大系本一、P二四四）

②ヲサナウカラシツケタ事ハ天性ノ様ナモノソ

〔『漢書抄』卷一45才〕（大塚一九八〇、第四卷、P九一）

〈引用文献〉

- 飯豊毅一 一九七三「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院  
大塚光信 一九八〇・一九八一『続抄物資料集成』清文堂出版  
岡野直七郎 一九六四『花を尋ねて』新星書房  
岡見正雄・大塚光信 一九七一『抄物資料集成』清文堂出版  
春日政治 一九四二『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』岩波書店一九八五、勉誠社復刊  
国語調査委員会 一九一六『口語法』（一九八〇、勉誠社）  
一九一七『口語法別記』（一九八〇、勉誠社）  
榊原邦彦・藤掛和美・塚原清 一九八四『今鏡本文及び総索引』笠間書院  
坂詰力治 一九八四『論語抄の国語学的研究 影印篇』武蔵野書院  
築島 裕 一九六七『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古点の國語學的研究 研究編』東京大学出版会  
鶴岡昭夫 一九九二『たけくらべ総索引』笠間書院  
中田祝夫 一九五四『古點本の國語學的研究 釋文篇』講談社  
一九七九、勉誠社改訂版  
仁田義雄 一九八〇『語彙論的統語論』明治書院  
馬淵和夫 一九八五『三宝絵詞自立語索引』笠間書院  
三矢重松 一九〇八『高等日本文法』明治書院  
一九二七、明治書院増訂三版  
森田良行 一九七七『基礎日本語一』角川書店  
山田孝雄 一九〇八『日本文法論』寶文館  
一九一四『平家物語につきての研究』  
一九五四、宝文館出版復刊  
湯澤幸吉郎 一九五九『文語文法詳説』右文書院

(略称文献)

総索引…近世文学総索引編纂委員会『近世文学総索引』教育社

一九八六 近松門左衛門全七卷

一九八八 井原西鶴全五卷

用語…近世作家用語研究会・教育技術研究所『作家用語索引』教育社

一九八五 森鷗外全六卷

一九八六 夏目漱石全十五卷

一九八七 志賀直哉全六卷